



夕食も食べられる」。

「イブニングスクール（余暇活動）にはスポーツや創作、パソコンなどいろんなコースがある」。そう言って彼の描いた自慢の絵を見せてくれました。

*

この町で、仲間といっしょに暮らしたい。みんなと働きたい。余暇を楽しみたい。家族になりたい。私たちにも何かができる！…そうした意欲、おもしろい、ねがいを大切にして徹底して支えようとするSPUCスタッフの専門家集団があります。

そしてこの自治体は、それをなす障害者施策と財政を市民合意していました。（そのべ ひでお）

北欧の小さな町で聞いた ヘンリケさんのくらしと余暇

全国障害者問題研究会事務局長 蘭部英夫

北欧・デンマークの首都コペンハーゲンから北へ車で1時間ほどにあるヘルシンガー自治体。この人口7万人の町は「定点観測地」の一つ。障害者、高齢障害者の住むアパートや24時間ケア付きの集合住宅、余暇活動センター機能が集中してある総合的な施設である「SPUC」を訪ねました。

「脱施設化（＝管理された自由のない「施設」でのくらしから、自分の意志で生活を主体的にきずいていける「家」でのくらし＝ノーマライゼーション）」のひとつのかたちとして町にはSPUCがあります。利用者は200人、内100人は隣接する住宅に住んでいます。スタッフは75人。一人の欠員には90人が応募するような人気の職業です。

ところで、デンマークでは一人の住まいを「ベッドルームとリビング+台所とトイレ・シャワー含め65平米」と法で定め、住宅政策を社会保障の基本にしています。

*

利用者会の代表としてヘンリケさん（50歳）が質問に答えてくれました。

通常の学校では勉強についていけず、障害児学級のある学校に転校したが、「英語など何もわからず大変だった」。卒業後、大規模な施設入所やグループホームも考えたが、当時は自分の好きなものが持ち込めなかったので、16歳で家を出て、アパートで一人暮らしをはじめた。「でも、さみしかった」。その頃からの生活アドバイザーが現在SPUC責任者の一人・ローネさん。今は、SPUC近くのアパートに住み、町中にある「カフェ・チャップリン」で働いている。それ以前は、競走馬厩舎やホイヴァンゲン（共同作業所）で働いていた。

「病院に行くときはSPUCのスタッフが一緒に、医者の説明をわかりやすく話してくれる。金銭管理もアドバイスしてくれる」「SPUCの中にある余暇活動の場では



自慢の絵を見せてくれるヘンリケさん

「大人」考 「発達」からみた「大人になる」こと

奈良教育大学 玉村公二彦

◆「大人」ということば

ライフステージの各段階には、幼年、少年、青年、中年、老年と呼称する方法（熟年はどこ？）と、幼児、児童、成人、老人という呼称の方法があります。前者は「年」で統一されているもの、一方、後者では、明確に、「児」から「人」に変化しているという特徴を持っています。「児」から「人」へと

いう変化は、「成人」のところ。「年」の呼称に照らしてみるとどうも青年のあたり―「青年」は「成年」の変化形かもしれませぬ。

一般的ではないけれど、映画館や遊園地などの入場券や風呂屋さんなどで通用している標記が、小人、中人、大人というものです。でも、この三つがそろって「しょうにん」「ちゅうにん」「だいにん」と音読みとなります。

大きい・小さいの関係で、「こども」と「おとな」の二分法からきたものですが、中人はそのどちらでもないということ、小中学生などをさしている」といわれています。

さて、「大人」ということばですが、「おとな」と読むのは、個々の漢字の音読み訓読み

の組み合わせでもない「熟字訓」―それぞれの漢字の読みでない組み合わせとなっている。大人関連では、「二十歳」を「はたち」とよむのも「熟字訓」の一つです。「二十歳」に関する法律が、民法に出てきます。その第四条に「年齢二十歳をもって、成年とする」と規定されているところから、「未成年」と「成年」二分法が由来します。少年法の適用も、この「未成年」にあたる二〇未満ということになります。

ところで、「成年」と「成人」はイコールらしいのですが、「成人式」とは言っても、「成年式」とは言いません。やはり、「大人」に成人をまるごと祝うということを意識しているのでしょう。

◆「成人」の時

―障害のある人たちの成人の日

一九七九年、養護学校教育の義務制がはじまり、どんなに障害が重くても教育を受けることができるようになりました。障害をもつ子どもたちの発達を明らかにするための長期的な追跡調査が、一九八〇年から京都で行わ

れました。それが障害児教育との出会いであり、私自身、二〇代後半のことでした。

その調査も終わり、就職して数年たった時、調査に協力いただいた親御さんから成人式を迎えたこの人たちの写真入りの成人を伝える葉書が送られてきたのです。一九九四年の一月でした。一九八〇年に小学校や小学部へ入学したその子どもたちが、この年、成人を迎えることになったことを知りました。「成人の日」の晴れがましい姿は、新たなスタートを示しているかのようでした。それから、すでに二〇年余になるうとしています。その時に、成人の年齢を強く意識することになりました。

イギリスでは、一九七〇年施行の家族法改正により、法的には一八歳が成人の年齢とされ、選挙権も与えられました。その一方、伝統的には、若者は二一歳になるとはじめて「名実ともにおとな」として認められてきたといわれています。二一歳の誕生日パーティーは特別なものとして祝われ、親から正式に自立し、はじめて独立するということで、その象徴として、「鍵」の形をしたカードやキー、鍵の形にならべられた花束が用意されます。未来を開く象徴として「鍵」が与えられるのです。イギリスの伝統が持ち込まれたアメリカにおいても、その影響は、障害児教育法制の中にもみられます。すべての障害児の教育権を認めた、一九七五年全障害児教育法は、三歳から二一歳までの障害をもつ人たちに特別な教育を提供することを定めたものでした。

日本の「成人式」は、区切りとしての二十